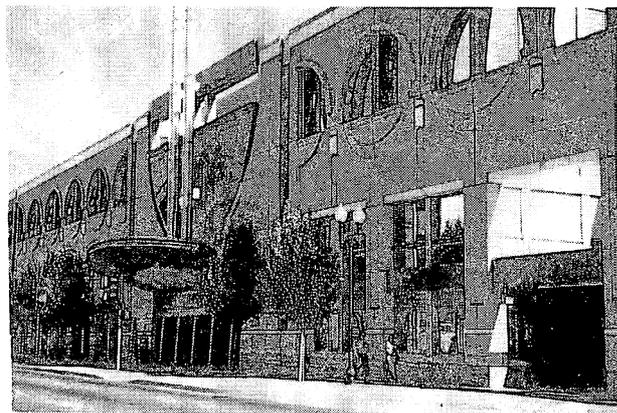


[GRAPEVINE]

第49回ASEV年次大会の概要報告

岡山大学農学部 岡本 五郎

ASEV親学会の1998年度大会は、6月22-26日に、サクラメント市のコンベンションホールで開催された(写真1)。参加人数は今年のサンディエゴ大会の時よりも多く、Irrigation Symposiumでは500人くらいの人々が出席していた。今回は、日本部会員としての参加は筆者を含めて小人数のようであったが、サントリー山崎工場の大西正巳氏の特別講演があり、また、会場で昨年ナパ見学でお世話になった Rymond 社の畠山恒次氏や Kosuge氏に出会った。



(写真1)

1. Irrigation Symposium (6月22-23日)

2日間にわたって行われたこのシンポジウムでは、ブドウ園のかん水技術の基礎から実際について、合計19名のスピーカーによってさまざまな見地からディスカッションされた。全体的にはワシントン州立大学の Bob Wample 氏と Sara Spayd 氏、カリフォルニア大デイビス校の Larry Williams 氏と Terry Prichard 氏が中心的役割を果たし、技術的な開発や成果については、カリフォルニア州とワシントン州、及び南オーストラリア州のブドウ園、ワイナリー 関係者から発表があった。

まず、セッション1では、このシンポジウムの

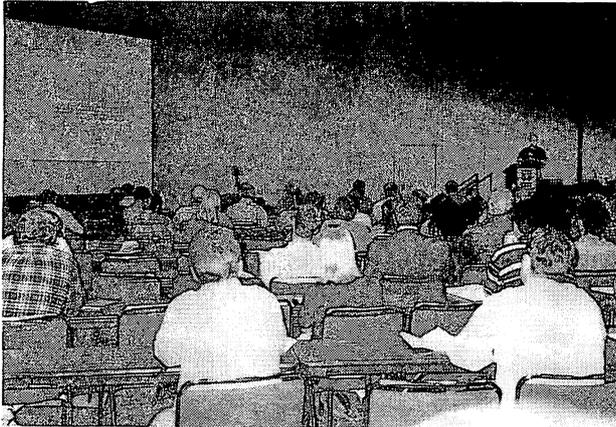
全体計画の説明、各地のブドウ園でのかん水の実情が紹介された。第2セッションでは、土壌水分の測定技術とそれに関する言葉の定義について Terry Prichard 氏が解説し、続いてブドウ樹の水分生理について Larry Williams 氏が説明した。セッション3は、具体的なかん水システムの設備や方法論がテーマで、3人のスピーカーが講演した。初日の最後であるセッション4では、ブドウ栽培家と醸造家各2名がパネラーとなって、かん水によって得られる効果や目標とすべきものについて意見交換をした。

2日目は、かん水の方法とブドウ樹の生産性と果実品質に関する実際規模でのプロジェクト研究の報告会であった。まず、南オーストラリアでの実験とワシントン州での実験がシンポジウム形式で紹介された。その後、ワシントンで行われた実験で醸造されたワインが運ばれてテイスティングが行われた。500人近い会場での試飲会は非常に壮観で、挙手によって評価の集計も行われた。午後はカリフォルニアでの実験の内容と成果が紹介された。これらはいずれも土壌水分条件やブドウ樹の水分状態と収量、果実及びワインの品質を試験したもので、品種はカベルネ・ソービニオン、シャルドネが中心であった。最後のセッション6では2日間のセミナーとおおしでのQ&Aであった。用語の確認や土壌水分検知器、かん水に用いるポンプやチューブなどの機能や新製品についての質問が多かった。ただし、シンポジウムのそれぞれの発表の要旨や資料は一切準備がなかった。そのため、筆者の英語力では十分な聞き取りができない場合が多く、申し訳ないが内容の正確な報告は困難である。

2. 研究発表

1) 口頭発表

6月24、25日に、Viticulture-Enology Joint Session (10題)と、2会場に分かれての Viticulture と Enology それぞれの Session (7題ずつ)が開かれた(写真2)。プログラムと主な概要はAJEV誌に掲載されるから、ここでは私が特に興味をもった2、3の研究発表を紹介する。



(写真2)

○ Mediterranean cultivar clonal comparisons in warm climate: Grenache, Muscat blanc and Muscat of Alexandria. L. Peter Christensen et al.

暖地でのブドウ栽培において、品種の系統による比較がフレズノで必要とされている。カリフォルニア、ミラノ(イタリア)、南オーストラリアで発見された各品種それぞれ3系統を栽培し、その樹体生長や果実生産性を比較した。

○ 2nd Joint Burgundy-California-Oregon wine-making symposium February 8 and 9, 1999. Christiana Butzke and Andrew L. Waterhouse.

1997年の11月に、第1回シンポジウムがフランスの Bourgogne 大学で開催され、当該3地域のワイン醸造家とワイン学者の交流と協力が進んだ。次のシンポジウムは1999年の2月にカリフォルニアで行われるが、USのワインメーカーがフランスのバーガンディー地方のワイン醸造方法やその技術を理解する絶好の機会である。同時に、各地域の大学生の交流と共同研究の機会を与えることも有意義なことである。

○ Factors causing semicircular cracking in Muscat of Alexandria grape berry. Goro Okamoto et al.

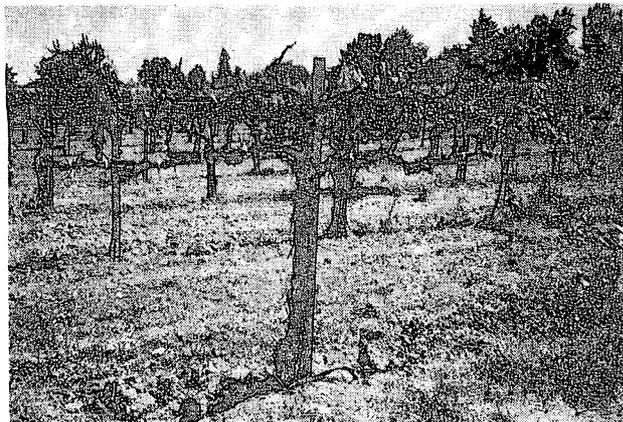
筆者が岡山で温室栽培されるマスカット・オブ・アレキサンドリアの「三日月裂果」の発生要因に関する発表を行った。概要は、成熟期になって降雨が続くと樹体全体が水分過剰の状態になり、果粒は横には肥大せず、縦軸方向に伸長する。早朝に果粒の膨圧が最大になったときに裂果が発生する、というものである。これに対して、裂果した果粒としなかった果粒のTSSに差はないか? 他の品種でも裂果は起きるのか? マスカットはGA処理しているのか? この裂果は市場価格に影響するのか? の4つの質問がなされた。

2) ポスター発表

Viticulture 関係12題と Enology 関係22題の発表が展示された。Viticulture 関係では、人工衛星による地形や土質の情報からブドウ園の能力を推定するシステム(GIS)と気象の情報からブドウ園の能力を推定するシステム(GPS)を結び付けて精度の高いブドウ園設計を可能にする研究や、収穫機械を利用して摘果を行ってカベルネ・ソービニオン of 果実品質を高める研究など興味ある内容のものが多かった。Enology 関係では、¹H-NMRを用いたポリフェノールと香気成分との相互作用の研究、非揮発性物質のポートワインのアロマに及ぼす影響、赤ワインによる人体の脂肪吸収抑制などのポスターが興味を引いた。

3. 果樹栽培地の見学

学会としてのエクスカージョンではないが、学会の後で個人的にサクラメントの北に位置する Sutter地方のブドウ園、果樹園を見学した。まず、ワインブドウ栽培では、やはりフィロキセラによるブドウ樹の衰弱や枯死が目立ち、改植が盛んであった(写真3、4)。しかし、すでにカリフォルニアのワインブドウ生産は飽和状態にあり、新植した苗がフル生産する数年後のブドウ価格を心配



(写真3)



(写真4)

する生産者が多いそうである。ユバ地域ではモモ、スモモ、アンズ、アーモンドなど核果類の栽培が多く見られた。最近ではクルミの栽培が盛んになっているという。帰りのドライブインで早生モモを買った。白肉で粘核、150g程度で、甘みは強いが果汁が少ないように感じた。